

Ⅳ ま と め

1 遺 構

1978年にはじまった法隆寺防災工事にともなう発掘調査は第4年目を迎えた。前年度までには西院回廊内および西院北部の調査と導水管敷設がおわり、すでに述べたように多くの新知見を得ることができた。

本年の調査は西院においては聖霊院南から大宝蔵殿前にかけて実施し、東院では北室院境内、西面大垣と西回廊中間および東院回廊内において主として旧導水管の取替えを中心として実施した。西院東大門から東院四脚門にいたる東西院中間の参道に沿う子院群の地も斑鳩宮の範囲・東院の寺地および中世以降の子院の変遷などを知るうえにおいて重要な地域であるので、この子院の南と北を通る両地区についても事前調査を実施した。ほとんどトレンチ調査であるが、寺域の土層観察にはまたとない好機であった。

A 西院地区

西院地区における本年度の成果の第1は、聖霊院前面や、東寄りの地で、北から南へのびる谷状の大溝が検出されたことである。聖霊院・東室の解体修理の際の地下調査の際に検出されていた地山の異常に深い落ち込み¹⁷⁾も、この谷の地形に関連するものと考えることができる。この溝は、今回のトレンチの中では西院伽藍の方位に一致せず、北で西偏しており、溝は自然の谷筋を流路としたものと思われる。出土遺物は西院伽藍創建時の軒丸瓦1個を除いてすべて若草伽藍にともなうもので異形の瓦製品を含んでいる。若草伽藍とこの大溝の関係は今後の検討を要するが、今回の調査で瓦類が東岸部に集中し、西岸部からは全く出土しなかったことから、これらの瓦類の投入が東側から行なわれたことを推定させる。このことは、出土瓦を葺いていた建物が谷の東方に建てられていて、若草伽藍当時、この谷が流路として生きていたものと考えることができるが、今回の調査は底幅1mほどのトレンチ調査であるので、その可能性を指摘するにとどめておきたい。

また、この谷は本来北方から南方へさがる谷で、西院回廊内および東室では地山は高く、谷はこの中間を北上する。しかし、大講堂東北方から東へ入れたトレンチでは地山が高く、大講堂東脇の北回廊基壇も地山を削り出しており、この谷が奥深いものであったとは考えられない。伽藍西方も西円堂の建つ丘との中間にかなり奥の深い谷があり、1979年の地藏堂・大講堂中間の調査では地山が深く、掘りきれなかったところがある。この谷は西回廊の西を南下すると考えられる。回廊の基壇も地山土の不足分を整地土で補ったうえに版築を行うところが多く、西院伽藍は谷にはさまれた狭い地形いっぱいを利用したことになるだろう。

西院東回廊と東室にはさまれた谷を埋立る山土の投入は、西方つまり西院伽藍側から行

われたものとみえ、西方から埋立て土層が順次斜面になって検出されている。その埋立て面に焼土・木炭片・灰などを捨てて、その上にさらに5 cm程の山土をかぶせて整地を終えている。このような状況からみて西院伽藍造成の際にこの谷も順次埋め立てられたものと考えられる。

この谷は宝蔵殿東側の東西大垣東側の旧河川からの距離が、高麗尺45丈に近く、若草伽藍の東限に当るのではないかとする推測もできるのである。ただ、この谷を若草伽藍方位¹⁸⁾で南々東へ延長すると、昭和43・44年度の若草伽藍の発掘調査の際の塔西方トレンチ内を通ることになる。しかし、ここでは表土から地山までが全体に浅くて谷にはならない。また、西院大垣南大門東方の修理工事の際、南大門中心から約39mの大垣下において検出した手彫り蓮華文鬼瓦、忍冬弁文軒平瓦をふくむ焼土層は、谷状遺構の推定ラインよりかなり西方へ振れることになり、この谷状遺構が南で西へ迂回している可能性も考えられ、今後の西院の調査に期待される。大講堂東脇と西院回廊東南隅南方で検出された若草伽藍に近い方位の小さい掘立柱穴はいずれもこの谷から西に位置する。これらの小さい掘立柱穴の性格も重要な問題であるが、このような柱穴が西院伽藍造営にともなう整地の後でなお残存していることは、西院伽藍造営以前にすでに西および北方へかなり開かれていたことを示している。

東大門から2度折曲って北へ延る西院東面大垣はその方位が西へ強く振れて若草伽藍と同様の傾向を示すことで注目されているが、この東方にほぼ平行して南流する旧河道がある。1959年に聖徳会館建設にともなう事前調査の際にはじめて検出され、これを若草伽藍の東限に当る重要な遺構と指摘されているが、今年度は2個所で検出した。流路は少くとも飛鳥時代から中世初期まで使用されて埋没河川となった。この川も奥深い谷の水を集めた地形による自然流路である。この旧河川のすぐ東方に7世紀の土器を出土した幅0.6 mの細い南北溝(S D 1008)が平行する。

さきの西院で検出した谷と、この旧河川の間隔は約150m強で高麗尺の45丈(175歩)に近く、当代の寺地規模に適当な幅であり、若草伽藍の東西範囲に当るものとみることもできるが、なお今後の調査にまつところが多く、現状ではそうした可能性を指摘するにとどめておきたい。

西院大宝蔵殿前で検出した2棟の掘立柱建物は柱が細く、掘り形の深さが50cm以下でかなり浅い。これはこの建物が簡単な構造であったことを示し、1棟は方位がかなり東で北へ偏するが、2棟とも西院造営時、またはその後間もなくの仮設建物か雑舎と考えられるものである。

聖霊院南に施釉陶片・灰焼土を含む土壌がある。伴出土器片から考えて、延長3年(925)に大講堂・北室・鐘楼等が焼亡した後に行われた整地工事に際して投棄したものと考えられる。

B 東院地区

東院では回廊内と西回廊外側の調査で東で北にふれる大溝を検出した。この大溝は東院伝法堂、舍利殿および絵殿およびその前面の地下で発見されている斑鳩宮かと思われる掘立柱建物群の南限と推定される²⁰⁾。この大溝は断面V字型の溝で、その底部の推積物はほとんどない。溝底は地下水面を掘り込んでいるので、内に多少の流れがあったものと推定できる。溝底は東から西にゆるやかに傾斜し、西方へ流れたものと推定される。宮の東・西・北の三面の範囲はまだ未確認である。

この大溝と伝法堂などの下層で検出した掘立柱建物群とでは、方位に少しずれがあるように見られるが、1982年度に伝法堂北側の調査を予定しているので、両方の調査成果の照合を行う予定である。

大溝の底および現東院回廊積土内から焼壁片および東院前身建物に使用したといわれている軒瓦が出土した。戦前の調査では面として焼土・灰があったと報告されているが、今回は前身建物にともなう焼土・灰の推積は検出することができなかった。ただ、焼けて固くなった壁土片は大量にあって、付近に焼失した建築物のあったことを示している。壁土片は戦前の調査でも確認されているが、大溝内・絵殿前の小土壙・東院造営の整地土などから出土しているので、東院前身建物のものであり、斑鳩宮に関係あるものとするならば発掘調査によって発見された我国最古の壁の遺物であることになる。

さきに記した斑鳩宮南限大溝かと推定される溝の南側約10m、で旧地形は急にさがり、東院造営にあたってここに最大厚約2.5mにおよぶ整地をしている。旧地形復元は1982年度の調査をまっけてから詳しい検討を行うが、東院の東南隅から東院四脚門南寄りを結ぶ線に台地端線があり、これとほぼ平行するように東院南面大垣南から東院、西院間の南側、羅漢堂東北を結ぶ線に庄内期の自然河川痕跡がある。この自然河川の方角と海拔51m、52m等高線による現地形もほぼ一致しており、北方から延びてきた台地縁辺に自然河川があったことを示している。この自然地形とさきにみた斑鳩宮南限大溝はその方位がやや異なり30度ほどの角度で交差する。大溝は自然地形とは違った走行方位にあり、この大溝が人為的な方位に合わせて掘られている可能性を強めるものである。この点についても今後の検討が必要である。

北室院境内から検出した掘立柱建物はその方位が現東院伽藍と同じで、それ以後の柵列がかえって東院下層の掘立柱群に近い方位にある。前者の遺構は3棟分ある。そのうち発掘区西方で東妻部分のみ検出した梁行2間の建物は東院伝法堂中軸線で折返すと長さ約36mになる。これを『東院資財帳』に見える5間僧房2棟を中軸線の東西に並べると、両者は約6m（20尺）隔てて並ぶことになる。この中間のあきをもふくめると、『古今目録抄』に見える12間房ともなり得るが、この建物の掘り形は約60cmであり、掘立柱とすると太い柱を想定できない。また柱穴の切り合いからみて他の2棟の小掘立柱建物より新しく、11

世紀中頃までには廃絶している。『資財帳』に見える僧房は瓦葺であり、この掘立柱建物を僧房と断定することはまだむずかしいが、北室院の南側、中宮寺西門付近のトレンチで緑釉片が出土しているので、伝法堂北側から北室院にかけて僧房などの生活空間があったとみることができる。

C 中間地区

ここでは西端で若草伽藍の東限かと推定する旧河川とその東側に7世紀の完形に近い土器を含む溝状遺構などが検出されたが、中近世には子院が並んでいた場所である。幅1.5m程のトレンチでは十分な調査ができず、子院関係の建物は地固めも少なく、礎石も小さく、修理・改造・建替えを受けることも多く全面的に発掘しても詳細な全容を解明することはなかなかむずかしい。今回の調査では、正覚寺・蓮花院・宗源寺・金剛院などにおのおのの池をもつ庭園があったことが判明した。善住院では素掘りの池を幕末に石組み地形井戸に変更し、蓮花院では素掘りの池を江戸時代後半に規模を縮小し、池の汀線ちかくに庭園用の瓦囲いの井戸をつくるなど庭園を整備している。金剛院においても素掘りの池を石組み護岸の池に改造し、その後に池を埋立てている。これらの子院のうち、宗源寺などは学侶方に属し、蓮花院・正覚寺などは堂衆方に属する。これらはともに庭園をもっていたこと、とりわけ堂衆方の庭園の整備が江戸時代後半に集中していることは、本報告書の子院の項と一致するが、なおいっそうの検討を要する課題であろう。

井戸についても各子院に設けられていたようで、その構造も曲物井戸から瓦製井筒をへて石積大型井戸へと変遷するようである。一木のくり抜き井戸などの特例もあるが、室町時代各子院には必ず井戸が付属しており、井戸が子院の区画を考える手掛りのひとつとなるようである。

D 整地土の状況

西院・東院とも最大深さ2.5mに及ぶ整地土がある。この整地土にはほとんど遺物を含まない黄褐色粘質土で、寺地裏山に同質の土がある。このため、整地土を地山と誤認しやすいことがある。

西院大宝蔵殿西方の調査区では、整地土に古墳時代の滑石製紡錘車と埴輪片がまじっていた。東院南門外のトレンチにおいても埴輪片が出土した。ともに江戸時代の整地土からの出土である。紡錘車と埴輪片はともに前期古墳のもので、江戸時代に寺地に近接した古墳をこわしてその封土を寺地の整地に用いたものと思われる。

西院綱封蔵前の調査などで、地表下約1mで地山になるが、この地山の洪積土には^{あいち}哈良火山帯にともなう火山灰の堆積と見られるものがあって、この面が大古の地表面であったことを示している。また、東院地区においても、地山の黒色粘土の厚い堆積のなかに火山灰層が薄くある。この火山灰土については現在調査研究中である。

2. 出土遺物

出土した遺物のうち、瓦類と土器類についてとりまとめておこう。

A 瓦 類

7世紀前半に属する軒瓦のうち、従来東院地区で見受けられる軒丸瓦(7)や軒平瓦(2)は斑鳩宮時代のもと考えられている。今回出土した軒丸瓦(7)は、東院東面回廊基壇積土中から出土したものである。回廊基壇は、地山上に積土を互層に積み上げたものであり、積土中には焼土を多量に含む層があって、火熱を受けた痕跡を示す土壁の断片も見られる。この焼土は、東院下層遺構にともなうもの、すなわち皇極天皇2年(643)の、蘇我氏による斑鳩宮焼亡時のものと考えられる。こうした焼土を混えた積土中から出土した軒丸瓦は、明らかに斑鳩宮時代のものであることを示している。そして、宮域内に瓦を何らかの形で用いた建築物が存在したことを示している。

この軒瓦は通常のものより小ぶりに作られているところに特徴が見られる。軒丸瓦にはかつてこの地で出土した忍冬弁を瓦当文様とするものがあり、これもまた小ぶりに作られる。これら2種類とも、瓦当筭そのものが小ぶりに作られている。しかし、これらと組合うと見られる軒平瓦は、成形に際して周囲を削って切り縮めている。このような小ぶりの軒瓦は、後世、たとえば奈良時代においては絵皮葺建物の葺に飾り瓦として用いたような、特殊な使用法が考えられている。東院下層遺構にともなう瓦類は、その出土量が僅少なため、これら小型瓦の使用法について明瞭な解答は出しにくい。しかし、出土している軒瓦がすべて小型品に限られる点は、さきに述べた葺瓦的な便われ方、すなわち絵皮葺き建物の一部に使った場合、あるいは、宮殿内の小規模な仏堂の存在などが可能性として考えられよう。

西院創建時の軒平瓦で、従来から注目されていた製作技法を明らかにし得る痕跡をとどめる資料を得た。それは、凹面側に、瓦当から平瓦部にかけて縦方向の剥落痕の見られるものである。その剥落痕には粘土を板状に切りとった際の糸切痕、粘土板の端と端を重ね合わせた際の痕跡をとどめている。こうした痕跡は、平瓦を粘土板桶巻作り技法によって製作する際に施される技法に共通する。軒平瓦を瓦当とともに桶巻作り技法によって製作する技法の存在した可能性はすでに指摘されている。法隆寺の資料については、創建時の軒平瓦の中に、瓦当部ともども桶型に巻きつけた痕跡をとどめるものが散見されるところから「軒平瓦桶巻作り」技法の存在を指摘したことがあった²¹⁾。今回の調査において、さらに良好な資料が加えられたことは、今後の軒平瓦製作技法の復原研究に資するところ大であらう。

天平年間、東院伽藍の造宮が行われる。7世紀後半における法隆寺西院伽藍の造営工事に際しては、「法隆寺式」と呼ぶ軒瓦が作られた。それに対して、東院伽藍造営時に大量に生産された軒瓦が具体的にどれであるのか、さほど明確ではない。しかし、この地域で数

量的にやや際立って出土するものは軒丸瓦では17、軒平瓦では13であり、この両者が組合せられたものと考えられる。いずれも平城宮で用いられたものと同範品である。ただし、平城宮での出土量は少ない。同範品は、他に山背恭仁宮で出土している。このように、これらの軒瓦が平城宮と恭仁宮の両宮跡で用いられたことは、これらの瓦が官によって生産されたものであることを示している。東院の造営は、周知のように、僧行信の懇請によって朝廷が造営したとされる。『法隆寺東院縁起』からは「造院司」が設置されたことが知られ、そうした経緯の一端を、軒瓦からも知ることができる。

平安時代の軒瓦の出土量はさほど多くないが、この時代に幾度か行われた修理工事の際に葺き替えられたもの、あるいは永承年間に大和の諸大寺で一斉に作られた際のもなどが出土している。これらは西院地域ではほとんど出土せず、主として東院地域から出土する傾向を示している。

特殊瓦製品は、かつてその例を見ぬものである。おそらく瓦製小塔の屋蓋と考えられ、今回ひとつの復原案を示した。部分的に遺存した資料のため、全体像をつかみかね、屋蓋の一部の復原を試みたにすぎないが、このような瓦製小塔の7世紀前半の存在を確認できた意義は大きいといえよう。

B 土 器 類

56年度の調査で出土した土器のうち、遺構との関連で特に注目されるのは、7世紀前半代の土器と西院聖霊院前で検出した南北大溝S D 2140・土壙S K 2135出土土器である。

7世紀前半代の土器は、これまでの調査でも少量ながら出土していたが、今回の調査では、遺構と密着し、しかもほぼ完形に近い形で出土しており、法隆寺造営以前の状況を知る上で貴重な資料を提供することになった。7世紀前半代の土器が、比較的まとまって出土した地域は、西院の綱封蔵の南と中間地区の律学院北地区である。前者の地区については、西院伽藍の方位とは大きく異なる掘立柱の建物の存在とあわせて考えれば、若草伽藍の維持管理施設が置かれていた可能性が指摘できよう。後者については、現西院東大垣や排水路の方位が斑鳩宮・若草伽藍当時の地割跡をとどめていると考えられて来たが、その周辺で同じような方位の南北溝が検出され、しかも、7世紀の土器が埋土に含まれていたことにより、先の想定は蓋然性は極めて高くなったと言えよう。

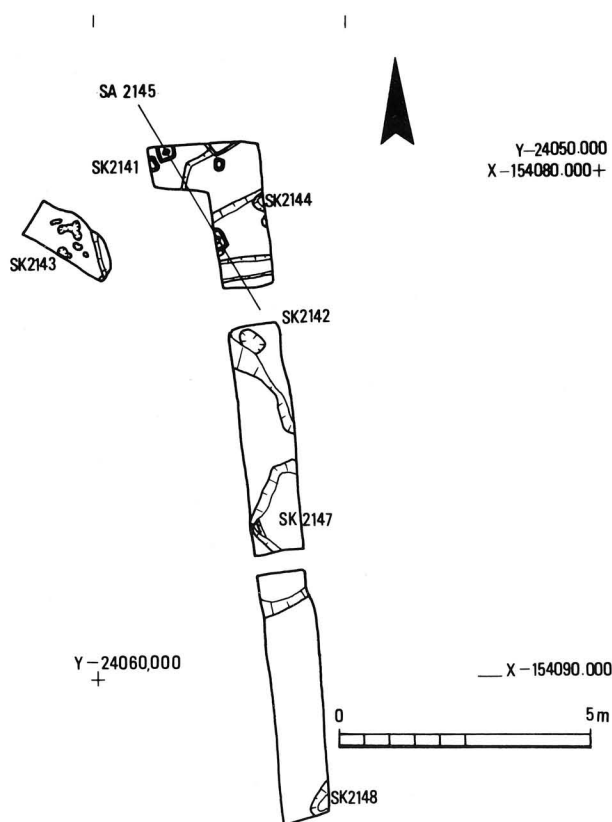
南北大溝S D 1240の埋土上層から出土した土器は、藤原宮や平城宮の土器研究の成果を援用すれば、7世紀末～8世紀初頭に位置付けできる。しかも、この土器群は、焼土の伴出している点に注意したい。日本書紀によれば、天智8（669）年と9年に斑鳩寺の羅災を伝える。S D 1240から出土した土器の年代は、火災時の年代に極めて近く、天智年間の火災記事の信憑性が極めて高くなったと言えよう。また、この溝の最下層から、若草伽藍の瓦とともに西院創建時の軒平瓦が出土しており、西院創建時の瓦についても、土器の方から年代の一点を付与する形になった。またこの溝の埋土の上に厚さ約30cmの西院創建時

の整地土が覆っており、S D 2140の埋土出土の土器は、西院創建の年代を考えるにあたっても重要な資料である。

西院造営時の整地土から掘られた土壌S K 2135から出土した土器は、型式学的に見て、平城京左京一条三坊大路東側溝上層S D 650 B 出土土器群と天禄4（973）年に焼失した薬師寺西僧房床面土器群との中間に位置付けられる。

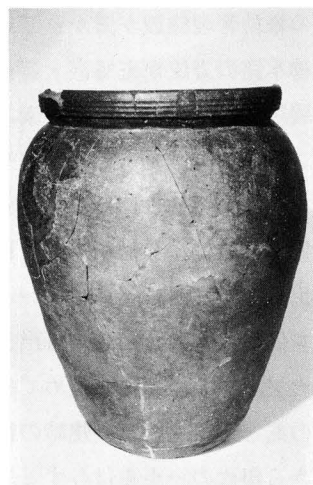
S K 2135は、ほんの一部を掘ったにすぎず、法量等の統計的な処理を行うに足る資料ではないが、一応、調整上の特色を揚げておく。土師器では食器類の調整に、e手法が、S D 650 Bに較べめだって多くなっている事、灰釉陶器では、底部不調整で、ハケ塗り施釉法の技法を持つものが見られる点が指摘できよう。

S K 2135は、すでに述べたように延長3（925）年の火災後掘られたゴミ捨て穴と考えられ、年代的に見ても、その土器は大和地方では今まで空白であった10世紀前半～中頃を代表する好資料と言えよう。今後もこの土壌周辺を調査する予定があり、更に良好な資料が検出されることを期待したい。



第80図 西院回廊東南隅南の遺構

S A 2145 西院回廊東南隅南方の81-8-Iトレンチで検出した掘立柱穴2個は、掘形の形状や埋め土の状況からみて、両者は組み合うものである。柱間寸法は2.05mある。方位は西院伽藍の方位とは大きく異なり、若草伽藍と同様な方位を示す。



第81図 SK 1064出土の甕

近世の遺物の中で特に注目されるのは、中間地区の81-9-IVトレンチで検出した埋甕と東院南門前の町屋に関連する遺構から出土した大甕である。両者とも備前で、慶長～元和年間の頃に比定できる。前者は、口径59cm、高さ92cmで、肩部に「二石入」と「井」のヘラ描きがあり、後者は、破片であるが、前者と同趣な形態をとる大甕で、肩部に「国手捻土□……」のヘラ描きを持つ。過去4年間の調査で検出した中近世の土器・陶器は、莫大な量にのぼるが、多くは、畿内産と目されるもので、外国産をも含め畿内以外の産と考えられる例は、前述した例を含め少量にすぎない。現在、これら中近世の土器・陶器類を整理しているが、それぞれの年代、産地同定、土器・陶器・磁器の組み合わせの検討は、他の社寺等との比較検討、中近世の塔頭との関連性によって追求することが必要である。このように、焼物什器の側面から、寺の興亡を考えていくことが今後の課題となろう。

註

- 1) 「法隆寺西南院の調査」『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。「法隆寺境内の調査」『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。立木修「法隆寺の調査」『奈良国立文化財研究所年報』1981。
- 2) 型式番号は『法隆寺の瓦』（法隆寺 昭和53年）による。
- 3) 奈良国立文化財研究所は平城宮跡発掘調査部員全員が交替でこれにあたり、橿原考古学研究所は前園実知雄が担当したが、昭和56年9月から中華人民共和国へ留学生として派遣されたため、これ以後菅谷文則が担当した。文化財保存事務所は法隆寺出張所員全員がこれにあたった。
- 4) 法隆寺国宝保存事業部「国宝建造物聖霊院修理工事報告」『法隆寺国宝保存工事報告書』第12冊 昭和30年。
- 5) 国立博物館『法隆寺東院に於ける発掘調査報告』 昭和23年。
- 6) 「瓦葺僧房貳間 長各五丈。今院家新造者。」 法隆寺蔵『法隆寺東院縁起』
- 7) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58-2 昭和47年。
- 8) 『法隆寺若草伽藍跡 昭和43年度発掘調査概報』、『法隆寺若草伽藍跡 昭和44年度発掘調査概報』 文化庁記念物課。
- 9) 四天王寺『四天王寺図録 古瓦編』 昭和11年。
- 10) 奈良国立文化財研究所「藤原宮第24次（東面大垣）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報9』 昭和54年。
- 11) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅸ」『奈良国立文化財研究所学報34』昭和53年
- 12) 註4に同じ。
- 13) 京都府教育委員会「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度調査概要」『京都府埋蔵文化財調査報告』 昭和53年。
- 14) 稲垣晋也「赤土器・白土器一中世かわらけの編年一」『大和文化研究』8-2 昭和38年。
- 15) 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報』 昭和45年。
- 16) 大阪府教育委員会『近畿自動車道天理・吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告』 昭和49年。
- 17) 註4及び、奈良県教育委員会文化財保存課『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』 昭和37年。
- 18) 註8に同じ。
- 19) 奈良県教育委員会『重要文化財 西院大垣（南面）福園院本堂修理工事報告書』昭和49年。
- 20) 註5に同じ。
- 21) 法隆寺『法隆寺の瓦』 昭和53年。